ISSN 0917−4729

北方民族博物館だより

No.56

H6. 14. 1　木製まじない具＜護符＞

民族名　コリヤーク
地　域　ロシア
1940年頃　（1993年収集）

トナカイの角に、木製の像がアザラシ皮で結びつけられている。資料の中心となるのは「聖なる火きり板」とよばれる人型をした部分で、腹部に火をおこした跡がある。コリヤークは海岸コリヤークとトナカイコリヤークに大別されたが、この資料はトナカイ毛の襟（えり）をもつこと等からトナカイコリヤークのものであると考えられる。犬型の像はトナカイの牧犬をあらわし、二つある二股の木をつかった像は、トナカイの群を守る牧童をあらわしている。火を敬うため、火をうみだした道具（火きり板）に対して供物を捧げた跡も残っている。トナカイの群を守る護符である。

1　木製まじない具＜護符＞
2　第19回北方民族文化シンポジウム
7　北海道博物館紀行
　③北海道立近代美術館
　④丸瀬布町昆虫生態館
8　調査報告　カムチャツカ／モンゴル
9　ロビー展／解説員研修／普通救命講習
10　谷本館長北海道文化賞受賞／INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第19回北方民族文化シンポジウム

2004. 10. 15 - 10. 17

第19回北方民族文化シンポジウム「北太平洋沿岸の文化－政治経済と先住民社会」をオホーツク・文化交流センター（網走市）を会場に開催しました。

ワークショップ　ポン・サラニプ作り

2004. 10. 15

講師　津田命子氏
（北海道立アイヌ総合センター学芸員）

「伝統文化と先住民社会」をテーマとし、ポン・サラニプを作るワークショップを開催しました。シンポジウム時に実技的なワークショップを行うのは当館が主催するようになってからは、はじめての事でした。津田氏にはこれまでにも２度当館の講習会講師をお務めいただいています。アイヌ民族伝統工芸の研究と継承の功績から北海道文化奨励賞を受賞されたばかりのところでした。

サラニプはアイヌ語で袋状になった入れ物のことをさします。今回は編んで「ポン・サラニプ」（ポンは小さいの意味）を作りました。

伝統的にはシナノキの樹皮などが材料とされてきましたが、今回はしゅろ糸を材料にしました。事前に取っ手、横糸、縦糸に切り分けたものをつかい、まず最初に取っ手となる部分を撚（よ）りました。次に底の部分から本体を編んでゆきました。ときどき霧吹きで柔らかくしながらの作業です。

参加者は、普段から各種手芸に親しんでいる方が多く、非常に具体的な質問もされていました。また津田氏はこれまでにお作りになった作品をいくつか見本として持参されました。材料をかえて編んだものや、少し底の形をかえるだけで異った印象を受けるかごなど、参加者は実際につくってみて、その違いをより体感できたようでした。　（学芸課　笹倉いる美）

右から二人目が講師

シンポジウム

2004. 10. 16 － 10. 17

本シンポジウムは北太平洋沿岸における政治経済と先住民社会の関係をテーマに開催しました。本テーマは昨年、一昨年に実施した「北太平洋沿岸の文化」シリーズの３年次目の最終回として、近代・現代の政治的・経済的変化と先住民の社会や文化に焦点をあてたものです。北太平洋沿岸を調査する代表的研究者を発表者として選定した結果、国外からの発表者は期せずしてアラスカ大学フェアバンクス校の３名の研究者となりました。国内からも北太平洋沿岸や北米北部を調査地とする６名の発表者を迎えることができました。以下に各発表の概要を紹介します。

第１部「政治経済と先住民社会」

大島　稔（小樽商科大学）
「コリヤークのトナカイ遊牧に関する政治経済的考察：カムチャツカ州カラギンスキー地区を例に」

カムチャツカ半島のコリヤーク自治管区ではトナカイ遊牧が現在でも先住民の伝統的経済活動の中で主要な位置を占めている。先住民コリヤークのトナカイ遊牧の歴史における政治と経済のかかわりについてカラギンスキー地区を例に報告する。カラギンスキー地区では、1930年代に６つの村落に集団農場が組織されていたが、1950年以降に一部村落の再編がおこなわれ、また1960年代には各地の小規模ソフホーズが、大規模なソフホーズへ統合され、さらに1970年に最終的な国営農場へとまとめられた。再編によるトナカイ飼育の統合は結果的に一定の経営的安定をもたらし、毎年、4,000～5,000頭を屠殺（とさつ）することが可能であった。しかし、このようなトナカイ肉の生産・流通は政府の資金援助によって補償されていた。こうした社会主義経済

によって、地域住民は生産されたトナカイ肉を地域の消費生活共同組合において廉価で買うことができた。

一方、国営農場への再編・統合はコリヤークの伝統的なトナカイ飼育に変化を与えた。家族によるトナカイ遊牧から作業班ごとの遊牧へとかわり、世代から世代へと伝えられてきた飼育技術や伝統文化を若い世代へ伝えることが難しくなってきた。また、集落の再編にともなう廃村や移住は、人びとに精神的打撃を与えた。こうした場合、古い集落に残ることを希望する年長者も多く、年長者たちは新しい村に移ると体調を崩し、亡くなってしまうことも多い。

ペレストロイカ以後のトナカイ頭数減少要因は複合的であるが、連邦政府の資金援助がなくなったことが最大の理由である。現在、コリヤーク自治管区政府は補助金を含めたトナカイ飼育産業再生策を模索してきている。コリヤーク自治管区全体の飼育頭数は増加傾向にあるが、市場や輸送など流通の面で課題は残されており、コリヤークの伝統的トナカイ飼育文化の伝承についても問題は解決されていない。

パティ・A・グレイ（アラスカ大学フェアバンクス校）
「チュコトカのトナカイ遊牧村における
ロシア経済再編の影響」

私はロシア連邦北東端のチュコト半島におけるトナカイ飼育民の村・スネズノエ村での調査をつうじて、農業部門の再編の長期的な影響を検証してきた。また、対照調査地としてチュコト自治管区の州都アナディールでも調査を行ってきた。ロシア北方ではトナカイ遊牧が集団農場、国営農場の主要な生産手段とされてきたが、1991年のソビエト連邦の崩壊後、連邦政府は国営農場の解体と民営化を実施した。この過程は、資産の個人所有化、移住労働者の引あげによる労働力・人材流失を伴い、政府資金の引あげ、経営の失敗、野生トナカイの増加によってトナカイ遊牧産業を弱体化させた。この過程は資産の個人所有化、雇用の場が狭まったことによって新たな不平等を創り出してきた。今日、市場経済のもとでは弱体化したトナカイ飼育産業を活性化させることや、極北の村の人びとの生活を向上させる見通しは立たない。

第２部「資源と政治経済」

荒井　信雄（北海道大学）
「ロシア極東部の漁業資源と政治・経済」

1980年代末の時点でロシア極東地域の漁業は一大産業であったにもかかわらず、水産品の輸出はごく限られ、漁業・水産加工は国内市場に特化したものであった。また、これら漁業企業の大型化、漁船の大型化が進み、大型のトロール船団が整備され、多くの従業員を雇用していたが、その一方で沿岸漁業は衰退していった。

ペレストロイカ以後、漁業会社の民営化の過程で巨大企業は細分化された。無数の企業が乱立し、国外の経済水域から撤退したこともあって、限られた漁獲量をめぐる過当競争が生じている。

また、漁獲は国際市場で需用の高い魚種に集中するようになり、日本に輸入されるカニのように密漁、密貿易が大半のものもある。

漁獲量の配分の最終決定権はロシア連邦政府にあるが、配分協議には地方政府も関与している。複雑な協議システムと漁獲配分システムの度重なる変更が、制度への不信と配分をめぐる過当競争をもたらした。多くの企業への少量の割当ては、割当てを超えた漁獲を日常化させ、結果として密漁や密貿易をさらに拡大させる要因となっている。

2004年、ロシア連邦政府は新たな水産資源配分のシステム改革を打ち出した。１）水産資源の全ての利用を有料化する、２）沿岸漁業については伝統的な利用者に長期の利用を認める、３）排他的経済水域における漁獲配分は連邦政府が行う、などが要点であるが、プーチン大統領の打ち出した大統領の権限強化方針からみれば、これまでの地方分権型の水産資源配分システムは縮小し、連邦政府の権限が拡大する方向へ向う可能性が考えられる。

岸上　伸啓（国立民族学博物館）
「カナダ・イヌイット社会における海獣狩猟と分配をめぐる政治経済
ーケベック州アクリヴィク村の事例からー」

カナダ・ケベック州北部のイヌイットの海獣狩猟と分配の分析から、狩猟・漁撈（ぎょろう）という生業活動そのものがさまざまな意味をもつ「資源」であることを指摘する。カナダ・イヌイットが外部の影響を受けた歴史は15世紀までさかのぼるが、最も大きい影響は1960年代の定住化である。毛皮交易による市場経済との結びつきは1910年代におけるハドソン湾会社の毛皮交易所の進出によるところが大きく、ホッキョクギツネの毛皮などと引き換えにヨーロッパの物品を入手するようになっ

た。さらに宣教師や政府の役人との接触も加わり、定住政策により村に住み、国の各種保護資金や労働による賃金収入、滑石彫刻や版画制作による収入などで現金収入が得られるようになった。1961年以降にはアザラシ皮の生産増加で狩猟活動が盛んになって毛皮交易に利用されるようになり、1975年以降にはジェームズ湾・北ケベック協定により先住民としての権利も与えられた。ところが、1983年以降、ヨーロッパの動物愛護運動によりECがアザラシ皮の輸入禁止を決議したことで、イヌイットは経済的苦境に陥った。

（1）現在のイヌイット社会の特徴は、1）経済的には政府の資金で成り立っていること、2）現在の狩猟・漁撈活動を維持するためにはガソリン、銃弾などのために現金が必要であること、3）人口が急増しているが、村の仕事は増えていないこと、4）市場経済と狩猟・漁撈経済の混合経済であること、の4点である。1983年以前の毛皮交易が成立していた頃には市場経済と狩猟が両立していた。しかし、イヌイットにとって狩猟活動は単なる経済活動ではない。イヌイットにとって大事なことは肉を分け合うことであり、そのことによって世界観や価値観を共有することができるのである。現金があるかぎり、狩猟・漁撈活動を維持し、伝統的な価値観、社会の連帯を維持することができる。

（2）現在、イヌイットの文化や価値観は多様化しているが、イヌイットは栄養価の高い地元の食料資源や既存の社会関係を彼らの生活にとって大切なものだと考えている。今や、イヌイットの現在の狩猟や漁撈活動は、現実に価値ある食料を入手すること、猟（漁）に出て行くことの満足感、食料を分配することによる社会関係の維持などをもたらしている。つまり、「狩猟」は経済的、文化的、社会的な「資源」とみなすことができるのではないか。

渡部　裕（北海道立北方民族博物館）
「カムチャツカ半島のサケ資源と政治・経済」

第二次世界大戦後、ロシア極東地域は漁業を主要産業とする国家戦略のもと、漁業の近代化が行われ、カムチャツカもその大きな役割を担ってきた。しかし、カムチャツカではペトロパブロフスク・カムチャツキーのアヴァチャ湾を基地とする国営企業群が大型トロール船、洋上加工船、運搬船などの大規模な船舶群と加工施設や冷凍庫などの陸上施設を保持していたが、それ以外の地域ではこうした船舶や加工・冷凍設備は小規模なものに留まっていた。これら沖合漁業に比べ、かつて一大漁業であったサケ漁業は小規模な沿岸漁業にとどまってきた。

コリヤーク自治管区の先住民は自家用に河川や沿岸で小規模なサケ漁を行ってきた。しかし、1980年代になると、こうした先住民の自家用的な漁業に制限が加えられるようになった。そしてペレストロイカ以後の集団農場、国営農場の解体と民営化にともなう経済混乱のなかで、先住民社会におけるサケの重要性は極めて大きくなってきている。

現在、サケ漁業は比較的少ない資金で操業できる漁業である。また、最近、クリスタビーナと称される地引網の一種がサケ漁に使用されているが、これは、さらに少ない資本で漁業を行なうことができる。だが、最近、こうした地方企業に対する漁獲枠は小さくなり、採算が取れない状況となっている。地方では漁業会社や水産加工場は先住民の雇用の場として重要であるが、一方的な政府の漁獲枠と漁期の決定は、地方経済の状況を考慮しているとは思えない。一定の割合で先住民を雇用する企業は「先住民会社」として認定され、地方の税が免除されるが、これは州の裁量であり連邦政府は資金的にこの制度にまったく関係していない。

世界的な生産状況をみてもサケの魚価はあまり高くはなく、ベニザケやギンザケを除くと採算性は低くなっている。地方の企業にとって最も収益が期待されるサケ製品は塩蔵魚卵（イクラ）である。先住民にとっても同じで、地方ではイクラの加工が活発であり、それらの一部は地下経済化している。

ペレストロイカ以後、民主的な政治体制への転換が図られ、地域住民は直接選挙によって知事や地方議員、下院議員を選出してきたが、先住民は新たな政治体制のもとでも少数者であり、自分たちの意思を反映した資源の利用や管理のイニシアチブを握ることは出来ない状況にある。地域の生物資源の行方は中央政府に握られている。地方あるいは先住民への政治的、経済的な配慮を欠いては地方の将来の見通しは明るくないであろう。

第３部「先住民アート・文化資源と政治・経済」

モーリー・リー（アラスカ大学フェアバンクス校）
「政治的な象徴としてのユピックエスキモーのコイル巻きかご」

現在、ユピックエスキモーのコイル巻き（巻き編み）かごは政治的なシンボルとなっている。ユピックのかごの起源は、アラスカ北部で作られるクジラ髭製のかごに、あるいは1915年までさかのぼることができるアサバスカインディアンのかごにあると考えられたりしたが、私の長年の調査から、これらの起源はシベリアにあり、ベーリング海峡を越えて東側に伝わったものであることがわかった。私は中央ユピックの55の集落を訪ね、その半数以上でこのコイル巻きかごが作られているのを確認した。この西から伝わったコイル巻きかごは、実は1880年代にモラビア教会の伝道師たちによって製作が奨励されたものなのである。モラビア教会は活動資金を得るためにコイル巻きかごを販売した。1906年の報告ではこのときコイル巻きかごは南部48州に送られていた。また、南部へ送るだけではなく、1890年のノームのゴールドラッシュに端を発する観光ブームのなかで土産としても利用された。このように19世紀後半以降、ユピックの女性は100年以上にわたってコイル巻きかごを草（ハマニンニク）で作ってきた。秋遅くに女性たちは、かごを作る者も作らない者も集団で海岸にこの草の採集にでかける。寒さのなかでのつらい作業であるが、互いの絆を強める作業でもある。

今日、先住民の伝統的な工芸品作りは全体として衰退してきているが、それにもかかわらずコイル巻きかご作りはさかんである。これらの製作がさかんであると同時に、コイル巻きかごは政治的なメタファー（隠喩）としての役割を持つようになってきている。先住民でも非先住民でもロゴや写真、さまざまなデザインに集団的政治行動のシンボルとして利用している。

かつてこの草はマットやブーツの詰め物、靴下、袋類、非常時の防寒材料など日常的に使われてきたものだが、文化変容をつうじてコイル巻きかごは伝統的な使われ方をした過去と今日を結びつけている。

大村　敬一（大阪大学）
「「芸術＝文化システム」への挑戦：交渉の場としてのイヌイト・アート」

カナダ国立美術館（National Gallery of Canada）の「イヌイト・アート」ギャラリーをはじめさまざまな美術館に彫刻や版画など、多彩なジャンルのイヌイトの芸術が展示され、高い評価を受けている。イヌイトは古くから「芸術」と呼ばれる作品を創っていたわけでもなく、「狩猟採集民」としての世界観を表現しようとしていたわけでもない。しかし、1950年代にグローバルな芸術市場にイヌイト社会が編入された結果として、イヌイト・アートが成立していったのである。イヌイトはもちろん「芸術」以前にさまざまな道具や儀礼具、狩猟具などを作る造形活動を行ってきたことはあきらかである。

イヌイト・アートの流通は1949年にカナダの画家であるジェームズ・ヒューストンがイヌイト・アートの潜在的な可能性に気づき、その育成に乗り出したことから始まった。連邦政府やハドソン湾会社などの援助を得ながら、イヌイトの彫刻制作の指導と販売を手がけ、また新たなジャンルとして版画制作を開発し、各地で展覧会を開催し、1960年代にはイヌイト・アートの芸術様式が完成した。イヌイト・アートは毛皮交易にかわってイヌイトに新たな生活手段を与えると同時に欧米社会のもつ「イヌイト・アート」のイメージを敏感に意識するものとなっていった。1980年代になるとイヌイト・アートの第二世代、第三世代が現れ、「伝統」的なイメージだけではなく、新たな表現手法やイヌイト社会の現実を対象とする作品も現れ始めるようになった。一方、従来の「狩猟・採集民」イメージはイヌイトの先住民運動が活発化するなかで自然保護運動とも結びつく肯定的な役割をも果たしてきた。

第４部「先住民社会と今後の政治経済的展望」

ディビッド・コースター（アラスカ大学フェアバンクス校）
「21世紀における先住民の生活ーカムチャツカ先住民の目からみた現状と将来ー」

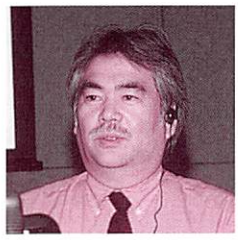
現在、カムチャツカの先住民のイメージは、ソ連時代あるいはソ連崩壊直後のものとは異なってきている。カムチャツカ西海岸のカブラン村は先住民イテリメンが多く住む村であるが、ソ連時代からイテリメンの文化復興の運動、言語の保存の動きがみられた。ペレストロイカ以前から、オレグ・ザパロツキーをリーダーに民族文化の復興をめざす組織が検討され、「イテリメン文化復興会議」が組織され、ハライモヴァ教授によるイテリメン語の復興運動が開始された。こう

した活動のシンボルとして1988年から「アルハラライ」祭が実施されるようになった。この祭はＳ.クラシェニンニコフが18世紀前半に記録したイテリメン文化に関する記述のなかの儀式がもとになっている。当時のイテリメンたちが「アルハラライ！」と唱えた言葉の意味は記録されていないが、ともかく現代のイテリメンたちはこの祭でダンスや工芸、料理などのコンテストや清めの儀式を行っている。地域レベルの運動ではあるが、この祭は民族運動のシンボルとして、集団的アイデンティティを示すものと、とらえられている。

通信や情報メディアの活用は先住民運動に重要な役割を果たしつつある。政府の情報は重要性を持たなくなる一方で、先住民は通信手段、情報メディアを手に入れることで活性化してきている。こうした先住民のメディアは最初のころは政府の援助を受けていたが、現在では自立しているものが多い。すべての情報が開示されているのだと人びとが思うことが大切なのだ。先住民のさまざまな情報を伝える新聞やホームページにより地域や世界の情報とつながりをもつことができるようになった。こうした手段は先住民にとってアイデンティティを再確認し、継承し、表明するための重要な手段となってきている。

渥美　一弥（放送大学）
「「情報」としての≪民族≫－カナダ西岸先住民サーニッチの政治・経済的状況－」

サーニッチはカナダ北西沿岸のブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー島南部のサーニッチ半島に居住する人口約2000人の先住民である。1991年以来、サーニッチの文化や言語の復興運動に立ち会ってきた。これまでの経験から、伝統文化を含む民族のイメージや



それにかかわる情報は、さまざまにとらえられ、伝わる過程で異なったものとならざるを得ないことから、「文化」という言葉を一旦「情報」という言葉に置き換え、「民族」という「情報」の伝達と定着のプロセスを検討したい。ここでいう「政治的」という意味は、先住民のイメージが作り出される背景としての、あるさまざまな状況である「力」を意味している。サーニッチが先住民として自らを意識するアイデンティティ成立にはヨーロッパ系カナダ人社会とサーニッチ社会の両方において、成長過程で体験する記憶が共通基盤となっている。さまざまな事例から「情報」は「文化」にもみえれば「伝統」にもみえてくる。私たちは「文化」というものの認識に無頓着（とんちゃく）であったが、部外者がある社会の「文化」を理解しようとするとき、固定的なとらえ方を排除する手段として、その生成過程を把握することが必要ではないか。　（学芸課　渡部　裕）

企画展のご案内

アラスカ遠征のパイオニア 明治大学アラスカコレクション

開催期間　平成17年２月５日［土］－３月27日［日］
会　　場　　当館特別展示室　　観覧無料

1960年、明治大学は創立80周年を記念して、アラスカに調査団を派遣しました。日本人によるアラスカ研究は、この調査以降に本格化したといえるでしょう。

本企画展では明治大学が収集した考古・民族資料を中心に、極北の地アラスカを紹介します。

企画展関連講演会
極北の地　ALASKA－過去／現在－

日時　平成17年２月５日［土］
午後１時30分～４時
会場　当館講堂　聴講無料

矢島國雄氏（明治大学文学部教授）
「日本人によるアラスカ考古学」
山内健治氏（明治大学政治経済学部教授）
「明治大学アラスカ学術調査団とその後」

※道民カレッジ連携講座　２単位

北海道博物館紀行

③北海道立近代美術館

2004. 10. 23

講師　浅川真紀氏（北海道立近代美術館学芸員）

北海道博物館紀行の３回目は、北海道立近代美術館学芸員の浅川真紀氏を講師に迎えて開催しました。浅川氏は数々の魅力的な展覧会や講座を企画・運営してきた美術館教育を専門とする学芸員です。

前半に北海道立近代美術館の活動について、豊富なスライドを使って紹介されました。北海道立近代美術館は1977(昭和52)年に開館し、以来道内美術館の中心的な役割を担ってきました。約3600点のコレクションのなかで、特に北海道美術とパスキン、シャガールに代表されるエコール・ド・パリ派の絵画、ガラス工芸が有名です。

また、特にお願いして浅川氏が企画した展覧会を紹介いただきました。いろいろなアイデアに満ちた美術展に、行ってみたかったという声が多数きかれました。

後半は当館が所蔵するイヌイトアートを題材にしたワークショップを、イヌイトの民話にでてくる「セドナ」という海の女神を題材に行いました。はじめにセドナについてのお話の朗読を聞き、セドナの姿を参加者が想像して描いてみました。その後イヌイトがアートのなかで、どのように表現したのかを、実物資料やスライドで確認しました。ほんの数分セドナについてそれぞれがイメージをふくらませる時間をもっただけで、そのあとに紹介されたセドナやイヌイトアートへの興味が違ってくるのがはっきりわかりました。

※北海道立近代美術館
〒060-0001　札幌市中央区北1条西17丁目
電話011-644-6881／ファックス011-644-6885
休館日／毎週月曜日（詳細は直接お問い合わせ下さい）

（学芸課　笹倉いる美）

④丸瀬布町昆虫生態館

2004. 11. 6

講師　喜田和孝氏（丸瀬布町昆虫生態館学芸員）

最初に講師から、館の歴史や現在の活動について紹介がありました。丸瀬布町は、1960年代の調査によって町内にオオイチモンジというチョウを中心に珍しい昆虫が多数生息していることがわかり、昆虫愛好者のあいだで一躍有名になりました。その後、1975（昭和50）年に地元の昆虫同好会によって「昆虫の家」が建設されました。その活動を引き継ぐ形で1997（平成９）年に「丸瀬布町昆虫生態館」が誕生したのです。

紹介の後、館の昆虫工作メニューのひとつ「およげゲンモ君」の製作を体験しました。「ゲンモ君」は、弁当などに入れるプラスチック製の醤油入れに、クリップや魚釣りに使う鉛の錘を取り付け、ゲンゴロウモドキの絵が印刷された耐水性のフィルムを被せて作ります。水を満たしたペットボトルに「ゲンモ君」を入れてキャップを閉め、ボトルを手で押してなかの圧力を変化させると、ゲンゴロウモドキが水中を泳ぐのと同様に「ゲンモ君」が沈んだり、浮かび上がったりするというものです。

今回の催しには、昆虫好きの子どもから年配の方まで、幅広い年齢層に参加いただきました。おもちゃづくりでは細かい作業にてこずる場面もありましたが、出来あがったおもちゃには皆さん大満足の様子でした。

※丸瀬布町昆虫生態館
〒099-0213 北海道紋別郡丸瀬布町上武利
電話01584-7-3927／ファックス01584-7-3925
ホームページ http://www.ohotuku26.or.jp/organization/mainsect/
休館日／毎週火曜日（詳細は直接お問い合わせ下さい）

（学芸課　中田　篤）

カムチャッカ調査

2004. 8. 2 - 9. 1

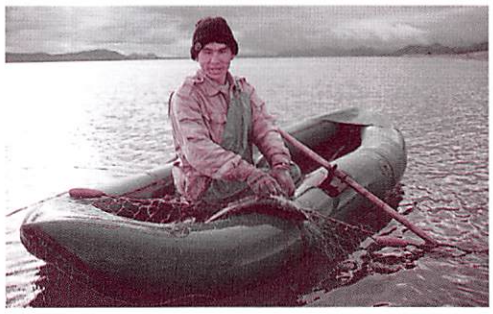
調査地：ロシア連邦カムチャツカ州
コリヤーク自治管区

本調査は平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））「先住民による海洋資源の流通と管理」（研究代表者　国立民族学博物館　岸上伸啓助教授）の研究協力者としてカムチャツカ半島の先住民による海洋資源であるサケの流通と管理に関する調査として実施しました。

最初にサケ漁業のもっともさかんな地域のひとつである南西海岸のオクチャブリスキー村を訪問しました。現代のサケ漁業の実態や先住民の共同企業によるサケ漁、加工などを観察することができました。

後半の日程で北部のコリヤーク自治管区、北東部のオッソラ村、カラガ村において先住民によるサケ漁・加工・流通に関する調査を行いました。こうした調査からロシア地方経済が崩壊するなかで、先住民の人びとは以前にもましてサケに依存する傾向が強まっていることがわかりました。　（学芸課　渡部　裕）

ボリシャイヤ川で漁獲されたカラフトマス／カムチャツカ南西部オクチャブリスキー村／撮影2004.8.4



刺網でサケを獲るコリヤークの若者。彼は1日120ルーブルのライセンス料を支払っている／カムチャツカ北東部カラガ村／撮影2004.8.18

モンゴル調査

2004. 8. 30 - 9. 24

調査地：モンゴル国フブスグル県ツァガーンノール郡

本調査では、モンゴル北部でトナカイ牧畜をおこなっている民族集団ツァータンを対象に、1）トナカイ群の放牧技法、2）放牧中のトナカイの行動パターン、を明らかにすることを目的としました。

この時季のトナカイ放牧は、朝トナカイ群を放牧地まで誘導して放し、夕方に集めて宿営地に戻るというパターンを持っています。そのため、トナカイ放牧に同行し、放牧者のトナカイ誘導のための行動、また放牧中のトナカイの活動などを観察しました。

その結果、トナカイを誘導するために、放牧者による「接近」のほか、声や口笛、棒で叩（たた）くなどの働きかけがあることがわかりました。また、放牧中のトナカイ群がひとつの谷間内だけを移動すること、時刻によって活動パターンに違いがあることが示唆されました。

なお、この調査は笹川科学研究助成による助成を受けて実施されました。

（学芸課　中田　篤）

立派な枝角を持つ種オス

放牧地に誘導されるトナカイ群

ロビー展

北の展示を彩る ポスター＆カタログ展

2004. 11. 1 - 11. 28

当館には毎日のように、全国の博物館・美術館から展覧会のポスターやカタログが大量に送付されてきます。開館以来保管してあるなかから、「北」に関係したものを紹介したのが、今回のロビー展『北の展示を彩るポスター＆カタログ展』です。

ポスターをまとめて掲示しますと、日本全国のあちらこちらで、いろいろと興味深い展示や催しが開催されてきたことがわかります。また、意匠をこらしたデザインのポスターには、観覧者から譲ってもらえないかという希望もよせられていました。

博物館・美術館のカタログは、一般にはなかなか流通していないため、このような機会をもうけて、多くの方にご覧いただきたいと思いました。他に類書の少ない貴重なものが多く、各々の館や担当者の思い入れがあふれたもので、私たちも大いに刺激を受けるものです。

当館ではOMI（オホーツク・ミュージアム・インフォメーション）という、近隣博物館情報をまとめたものを年に４回発行しています。そこでOMIコーナーとして、関係博物館からリーフレットやちらしを提供していただき、観覧者に配布し、諸博物館の活動についても紹介しました。

いつもこのように貴重な印刷物を送って下さるすべての関係機関に感謝申し上げます。今後も大切に保管し、当館の活動に役立ててゆこうと考えています。

（学芸課　角達之助）

解説員研修

当館では現在５名の解説員が、展示解説、発券・案内業務等を行っています。普段より館内では展示資料について学習をしたり、オリエンテーションや体験学習指導技術の向上などを図っています。館外研修として11月30日にはオホーツク流氷館を訪問し、実地見学と職員との交流を行いました。また「視力障害者への心配りとサポート」に関する特別講座に参加し、今後の業務の参考としました。

先に行った道立美術館・博物館のアンケートでは、当館職員の対応について、82.6%が「とても良い」あるいは「良い」との回答をして下さいました。今後も来館者の方がたに気持ちよく博物館を利用していただけるよう解説員をはじめ、職員一同努めて参りたいと思います。

（管理課　芦口由紀）

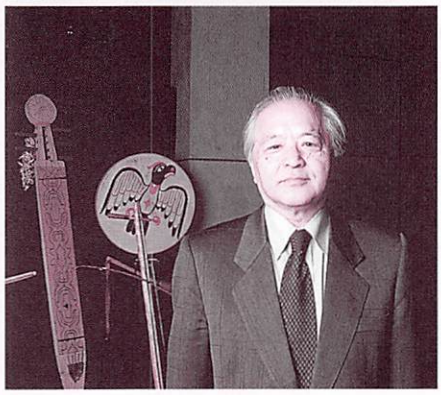
オホーツク流氷館

普通救命講習 2004. 11. 16

網走地区消防組合の指導のもと、普通救命講習を職員が受講しました。初期救命活動の重要性についてビデオで学習したのち、心肺蘇生（そせい）法の人工呼吸と心臓マッサージの訓練を行いました。複数の職員で対応可能なよう、二人一組での実技も行いました。講習の成果をいかす機会がないことを願っていますが、当館で不測の事態がおこった場合、適切に対処できるよう日ごろより心がけています。

（管理課　冨塚和美）

谷本館長北海道文化賞受賞



谷本一之当館館長が、「北方民族音楽等の研究及び文化の振興」の功績により、平成16年度の北海道文化賞を受賞しました。
事績は次のとおりです。

「北方民族音楽等の研究及び文化の振興」
長年にわたり、アイヌ民族音楽を含む北方民族音楽・文化の研究に携わり、数々の著書や論文を発表するとともに、これらの集大成として刊行された『アイヌ絵を聴く：変容の民族音楽誌』は、アイヌ伝統文化の研究成果として国際的に高く評価されている。また、北海道文化審議会副会長・会長として10年にわたり本道の文化振興に尽力されるなど、北方民族音楽等の研究及び文化の振興に大きく貢献している。

INFORMATION

斜里町立斜里中学校G組、斜里小学校桂組(左)と小清水町立水上小学校(右)のみなさんが版画で作ったカレンダーが寄贈されました。受付・情報普及室で来館者を迎えています。

行事案内 2005. 1-3

◆博物館クラブ
「イヌイト・ヨーヨーづくり」
1.10[月]
講師　渡部　裕（当館学芸課長）

◆博物館クラブ
「フェルトでつくるペットボトルホルダー」　1.15[土]
講師　齋藤玲子（当館学芸員）

◆講習会
「草木染め体験」
1.29[土]
講師　齋藤玲子

◆企画展関連講演会
「極北の地ALASKA　過去／現在」
2.5[土]
講師　矢島國雄氏（明治大学教授）
　　山内健治氏（明治大学教授）

◆博物館クラブ
「イグルーで冬キャンプ！雪の家宿泊体験」
2.26[土]～27[日]
講師　中田　篤（当館学芸員）

行事報告

◆ロビーコンサート2004
青少年のための室内楽の夕べ
2004.12.18［土］
演奏：札幌交響楽団員
バイオリン　石原ゆかり、富樫耕
ビオラ　遠藤幸男
チェロ　川崎昌子
演奏曲目　ユーモレスク他

寄贈図書

大沼忠春編　2004『考古資料大観11：続縄文・オホーツク・擦文』小学館

参加報告

◆2004まなび塾フェスティバル（同実行委員会主催）
2004.11.23[火]　於：オホーツク・文化交流センター（網走市）
当館はウイルタのやじろべえ作りを行い、約60名の参加がありました。

北方民族博物館だより
No.56

平成17(2005)年1月14日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888　FAX 0152-45-3889
e-mail：hoppohm@ohotuku26.or.jp
http://www.ohotuku26.or.jp/hoppohm/